

田野町文化財調査報告書第5集

まる の 丸 第 2 遺 跡

— 第2次調査 —

県営農地保全整備事業七野地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1988

た の
宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

まる の 丸 第 2 遺 跡

— 第2次調査 —

県営農地保全整備事業七野地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1988

た の
宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

序

田野町教育委員会は宮崎県の委託を受けて昭和61年度から田野町七野地区特殊農地保全整備事業地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。昨年度は、丸野第2遺跡の大半について発掘調査を実施しましたが、昭和62年度は事業地区の変更に伴い遺跡の北西側斜面の調査を行いました。本書はその概要報告であります。

丸野第2遺跡は縄文時代後期を中心とする集落跡であります。本年度の調査では、この集落の上器廐棄場の広がりが明らかになるとともに多量の土器片が出上しました。また、アカホヤ火山灰層の上で検出されました配石造構は、縄文時代後期のものとしては宮崎県内でも類例が少なく、土坑などの遺構と合わせて、南九州におけるこの時期の集落の様相を解明するための貴重な資料のひとつになることと存じます。

なお、これらの調査成果を、学術研究上の資料として、また、社会教育や学校教育の場において、文化財保護に対する認識と理解を深めるために役立てていただければ幸甚のいたりであります。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで深い御理解と終始熱心な御協力を賜りました関係機関や地元町民各位に衷心より厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月31日

田野町教育委員会

教育長 種子田 栄 幸

例 言

1. 本書は、田野町七野地区の県営農地保全整備事業に伴い、昭和62年度に実施した丸野第2遺跡の第2次発掘調査概要報告書である。
2. 調査組織は次の通りである。

調査主体 田野町教育委員会

教育長 稲子田 栄幸

社会教育課長 川口 昭七

補佐兼 社会教育係長 新坂 政光

社会教育係

主任主事 後藤 哲男（調査事務担当）

調査員 滋賀総合博物館

埋蔵文化財センター主任 菅付 和樹

調査補助 [REDACTED] 寺師 雄二・後藤 哲男

調査協力 [REDACTED]

3. 本書に掲載した挿図は、遺構整図を [REDACTED] が、拓本を [REDACTED] が行ったほかは菅付がこれを作成した。
4. 本書の図版のうち、遺構写真は寺師・背付が、遺物写真は菅付が撮影した。
5. 本書の執筆は、後藤・菅付が分担し、文責については目次に明記している。また、本書の編集は背付が行った。
6. 本書に用いた北は磁北、標高は海拔絶対高である。また、本書に用いた記号はM, N, S, Cが土坑、S, Iが配石・集石遺構を表わす。
7. 出土遺物は田野町教育委員会で保管している。

本 文 目 次

第Ⅰ章 序 説	1
第1節 発掘調査に至る経緯	(後藤) 1
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	(菅付) 1
第Ⅱ章 調査の結果	(菅付) 4
第1節 調査区の設定と概要	4
第2節 包含層の状態	4
第3節 網文時代の遺構と遺物	6
1. 遺 構	6
2. 遺 物	15
第4節 弓生時代の遺構と遺物	24
第Ⅲ章 結 語	(菅付) 24

挿 図 目 次

第1図 丸野第2遺跡及び周辺遺跡分布図	2
第2図 周辺地形図	5
第3図 E地区A-A'地点上層断面図	7
第4図 E地区遺構配置図	9
第5図 E地区SI2・SI8遺構実測図	11
第6図 E地区SI19・SI24遺構実測図	12
第7図 E地区SC4遺構実測図	13
第8図 E地区SC8遺構実測図	14
第9図 E地区出土土器実測図・拓影(1)	16
第10図 E地区出土土器実測図・拓影(2)	17
第11図 E地区出土土器実測図・拓影(3)	19
第12図 E地区出土土器実測図・拓影(4)	21
第13図 E地区出土土器実測図・拓影(5)	22

図 版 目 次

- 図版 1 E 地区近景（北から）・上器密集部分遺物出土状況（南から）
- 図版 2 遺物包含層断面状況・遺構全景（南から）
- 図版 3 配石遺構分布状況・SI 8～SI10検出状況
- 図版 4 SI 2 検出状況・SI 8 検出状況
- 図版 5 SI19検出状況・SI24検出状況
- 図版 6 SC 4 完掘状況・SC 8 完掘状況
- 図版 7 E 地区出土縄文土器（1）
- 図版 8 E 地区出土縄文土器（2）
- 図版 9 E 地区出土縄文土器（3）
- 図版 10 E 地区出土縄文土器（4）
- 図版 11 E 地区出土縄文土器・弥生土器
- 図版 12 その他のE 地区出土縄文土器
- 図版 13 その他のE 地区出土縄文土器・土器片加工品
- 図版 14 E 地区出土石器

第一章 序 説

第1節 発掘調査に至る経緯

宮崎県宮崎郡田野町において、昭和61年度から、七野地区の県営特殊農地保全整備事業が行われている。それに先立ち、事業区内の埋蔵文化財の調査として、昭和60年12月に田野町教育委員会が分布調査を行い遺跡の存在が確認されている。前年度調査の段階で丸野第2遺跡の一部であると確認された昭和61年度発掘調査事業区の北側斜面（農道を含む）の保護について、宮崎県中部農林振興局と協議を行ったが、事業施行上、保存が困難な地帯であり、高台のため農地保全整備事業との並行発掘が難しいということで、前年度に引き続き昭和62年度に記録保存の処置をとることになった。

昭和62年8月に地元との協議も終わり、同年8月25日～10月29日まで発掘調査が行われた。

七野地帯事業区の発掘調査は、今回で2年目であり、事業区内他地域についても、今後調査を行ってゆく。

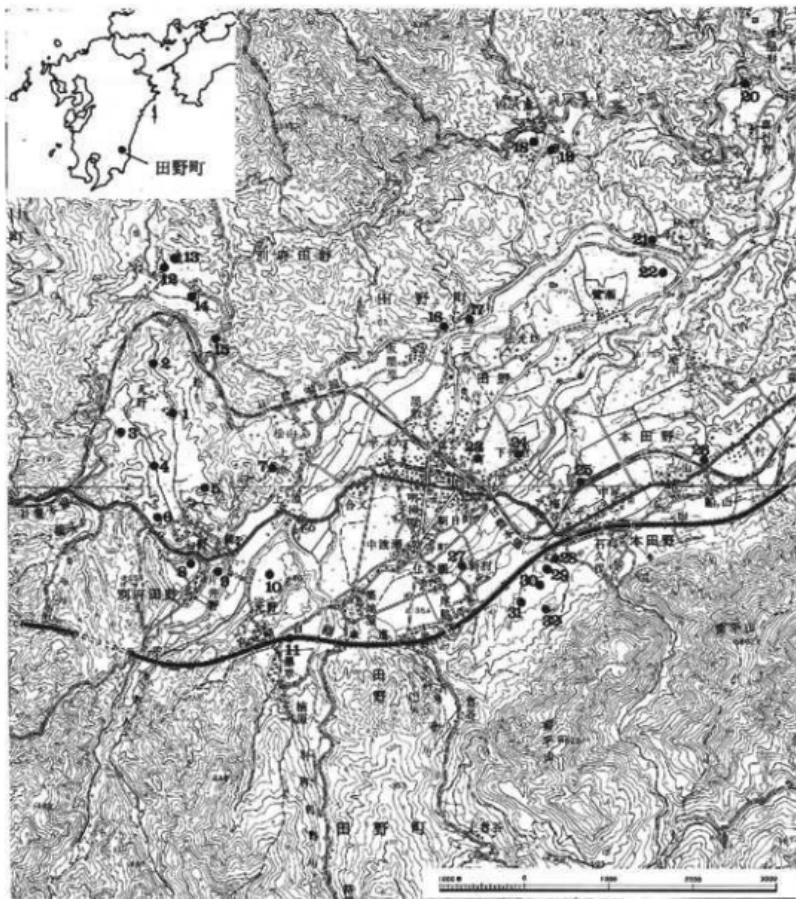
第2節 遺跡の立地と歴史的環境（第1図）

田野町は県都宮崎市の南西約20kmに位置し、鶴塚山系の山裾に抱かれた田野盆地を中心とする町である。田野盆地には、清武川とその支流によって開拓された標高120～140mの台地と谷底低地が形成されている。周囲は、南東から北西部を標高600m～200m級の山地が取囲み、北東部は開けて宮崎平野を望むことができる。

丸野第2遺跡は、このような台地のうちの町北西部七野地区に形成された広大な台地の最高所（標高約220m）一帯に位置する。

当遺跡周辺の歴史的環境を時代順に概観すると、旧石器時代では、従来ナイフ形石器が表面採集された萩ヶ瀬遺跡⁽¹⁾（宮崎大学実習林入口）が知られていたが、昭和58・59年に行われた前平地区の発掘調査によって遺跡の発見が相次いでいる。先ず、芳ヶ迫第1遺跡では、ナイフ形石器、剥片尖頭器、三棱尖頭器、彫器、搔器などが出上し、次いで芳ヶ迫第3遺跡では石核、剥片尖頭器が出上、札ノ元遺跡では石核、ナイフ形石器が出土した。これら3遺跡ではいずれも集石遺構が検出されている。⁽²⁾

縄文時代早期の遺跡としては、貝殻条痕土器の前畠遺跡⁽³⁾が知られていたが、前平地区的4遺跡の発掘調査によって芳ヶ迫第1遺跡、同第3遺跡、札ノ元遺跡で集石遺構が検出され、札ノ元遺跡と又五郎遺跡⁽⁴⁾では竪穴住居跡が検出されている。このうち、札ノ元遺跡の竪穴住



第1図 丸野第2遺跡及び周辺遺跡分布図

- | | | | |
|-----------|---------------|---------------|-------------|
| 1. 丸野第2遺跡 | 9. ヒダカソ城址 | 17. 萩ヶ瀬遺跡 | 25. 梅谷城址 |
| 2. 丸野第1遺跡 | 10. 高野原地下式横穴墓 | 18. 堀口A遺跡 | 26. 船ヶ山遺跡 |
| 3. 長戸遺跡 | 11. 黒草遺跡 | 19. 堀口B遺跡 | 27. 青木遺跡 |
| 4. 七野第1遺跡 | 12. 八重B遺跡 | 20. ズノ山遺跡 | 28. 又五郎遺跡 |
| 5. 七野第2遺跡 | 13. 八重C遺跡 | 21. 灰ヶ野地下式横穴墓 | 29. 札ノ元遺跡 |
| 6. 七野第3遺跡 | 14. 八重A遺跡 | 22. 灰ヶ野遺跡 | 30. 芳ヶ迫第1遺跡 |
| 7. 天建神社址 | 15. 前畠遺跡 | 23. 桜町遺跡 | 31. 芳ヶ迫第3遺跡 |
| 8. 片井野遺跡 | 16. 田野城址 | 24. 井倉洞穴遺跡 | 32. 芳ヶ迫第2遺跡 |

居跡は方形プランのものである。これら4遺跡は互いに近距離にありながら出土土器は特徴的な様相を示している。即ち、吉田・前平式土器は芳ヶ迫第3遺跡にはみられず、また、手向山・平格式土器は札ノ元遺跡にのみみられ、塞ノ神式土器は又五郎遺跡にのみ出土し、押型文土器は1遺跡に共通してみられるという状況である。前期・中期の遺跡は県内全般にわたって遺跡の発見が少ないと、田野町内においても同様で、今回丸野第2遺跡A地区で前期曾畠式土器が出土し、また、中期にさかのぼる可能性のある凹線文土器が出土したのは注目される。後期の遺跡としては、当遺跡の北々西約1.5kmに位置する丸野第1遺跡のほかに、⁽⁵⁾指宿式・綾式・下弓田式(市来式)土器などが出土した青木遺跡。⁽⁶⁾黒草遺跡が知られている。また、晩期の遺跡としては、先述の芳ヶ迫第1・第3遺跡で晩期前半の土器が出土し、丸野第1遺跡にもみられる。

弥生時代の遺跡としては、これまでに終末期の土器が黒草遺跡で確認されていたが、昨年度調査の丸野第2遺跡A地区で後期前半の堅穴住居跡が検出されたほか、当遺跡では中期の土器も出土している。この弥生時代以降、古墳時代から古代にかけての田野盆地周辺は、遺跡詳細分布調査が行われていないせいもある。遺跡の発見、調査例とも非常に少なくなる。古墳時代の遺跡としては、わずかに灰ヶ野と高野原で地下式横穴墓が調査確認されているにすぎず、当時の集落や高塚古墳の存在などは現在までのところ発見されていない。また、古代における田野盆地は、宮崎平野部から清武を経て内陸部都城盆地、さらに大隅へと至る交通の要衝の地であったと考えられることから、延喜式の日向16駅のひとつ「故式駅」の所在地をここに想定する説もあり、今後、この駅や官道関連の遺跡が確認される可能性もある。

中世から近世にかけての遺跡もあまり多くは知られていない。田野城址を中心とする中世の山城関連の遺跡や石塔群、社寺址など島津氏と伊東氏の攻防の歴史から考えると、低丘陵地や山地等に未発見の遺構が埋没している可能性は高い。明確な住居跡などは検出されなかつたが、備前焼甕や東幡系片口鉢などの中世陶器、青磁・白磁片が出土した遺跡として前平地区の芳ヶ迫第2遺跡があげられる。

- 註 (1) 宮崎県教育委員会「九州縦貫自動車道(宮崎線)関係遺跡分布調査報告書」1968
(2) 面高哲郎・寺師雄二「芳ヶ迫第1・第2・第3遺跡、札ノ元遺跡」「田野町文化財調査報告書」第3集 1986
(3) 茂山 譲「宮崎郡田野町採集の貝殻条紋陶土器」「宮崎考古」第4号 1978
(4) 又五郎遺跡については未報告である。
(5) 鈴木重治「宮崎郡田野町青木遺跡の調査」「日本考古学協会第28回大会研究発表要旨」1963
(6) 岩永哲夫・北郷泰道「黒草遺跡」「九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書」(3) 1979
(7) 長津宗重「丸野第2遺跡」「田野町文化財調査報告書」第4集 1987
(8) (2)と同じ

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 調査区の設定と概要（第2図）

当遺跡は標高約224mの台地の最高所を中心に南北に展開する遺跡である。前回の調査では台地南斜面の畠地を東からB・A・Cと地区設定し、約5,600m²を発掘している。その結果、いずれの地区でも南半部で縄文時代後期前葉～中葉の竪穴住居跡が検出された。その数は26軒にのぼる。このほかにも、土坑群・ピット群・弥生時代後期前半の竪穴住居跡1軒が検出されている。また、A地区の北端部では多量の土器が出土した土器窯まりが確認され、D地区とされた。

本年度の調査は、このD地区から北西方向へのびる舌状尾根部約1,060mについて実施されることになり、昭和62年8月19日に先ず試掘調査を行った。その結果、土器窯まりに続くと考えられる遺物包含層が確認できたため、ここをE地区として8月25日～26日に重機で表土を除去、翌27日から10月29日までの間本調査を行った。前回の調査で設定された南北方向5m方眼のグリッド基準杭はその後失われてしまったため、今回は尾根線に沿ってグリッドと土層断面トレーニチを設定した。従って、前回調査区との位置関係は地形測量図によってのみ確認できることになり、多少の誤差が生じることは否めない。

本年度の調査では、D地区に続く畠地の土手と農道になっている部分を中心に多量の土器を集中して包含する層と、その北西側下位において焼難を集石あるいは配石した遺構が検出された。そのほかに、土器包含層の下層や斜面側から土坑も検出している。遺物としては、縄文時代後期中葉を中心とする可能性のある土器や前期、弥生時代中期後半の土器等が出土している。また、今回の発掘調査でも、前回同様石器の出土量は極端に少ない。土器片転用加工品では円盤が多く出土し、土器片錐はわずかに1点確認したにすぎない。

第2節 包含層の状態（第3図）

前回の調査では、A～C地区の南半部にのみアカホヤ火山灰層が残存し、A地区北側の最高所付近は山躑躅を多く含んだ層が露出していた。また、遺物包含層はアカホヤ層の上の黒褐色土層であった。

今回調査したE地区は、表土を除去すると、農道部分とそこから続く畠地の高所部分に遺物包含層が確認され、その下層には、斜面上にアカホヤ火山灰が堆積している様子が断続的に観察された。アカホヤ火山灰層（Ⅲ層）は畠地の中程で消滅し、かわってその下層の暗黄褐色シルト質土層（V層）が地表にあらわれる。また、宮崎平野部で縄文時代早期の遺物が



第2図 周辺地形図

包含される層はⅢ層に対応しているかのように断続的に傾斜するⅣ層であると思われる。畠地の高所側で検出された配石遺構は、Ⅲ層の上のⅡc 層下部から堆積状態の薄いⅢ層あるいはその下層にかけて作られている。また、包含層のうち昨年度のD地区から純く土器密集部分は、Ⅱa・Ⅱb 層であり、特にⅡb 層には遺物が集中し、今回報告する遺物の大半はこのⅡb 層から出土している。Ⅱc 層は主に包含層の末端部的な様相を示し、配石遺構の上部ぐらいまでは出土量も多いが、Ⅱb 層程ではない。遺物の殆どを占める土器片のうち比較的大きな破片はⅡb 層下部からⅡc 層上面で出土している。石器自体の出土量は極めて少ないが、石皿など大きなものは配石遺構に使われており、包含層からは出土していない。また、磨製石斧や比較的出土量の多かった砂岩製と思われる剝片は包含層から出土している。

第3節 縄文時代の遺構と遺物

今回は、まだ出土遺物の整理も完全には終えていないため、現時点での概要を述べる。

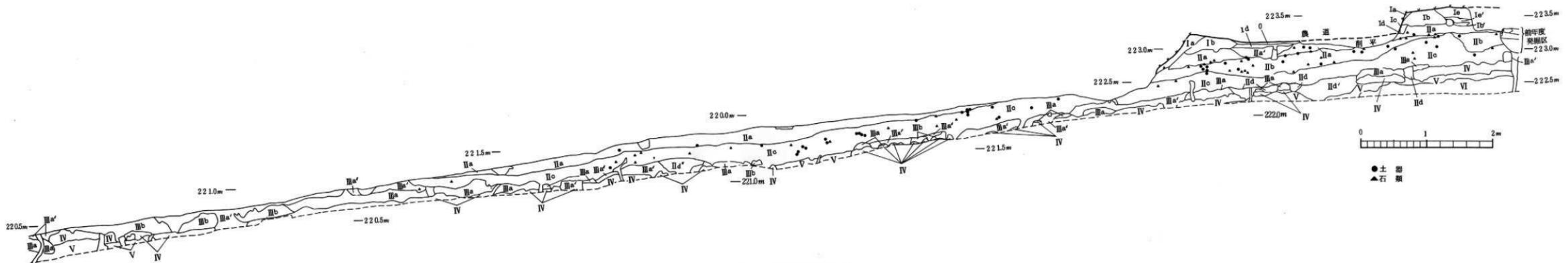
1. 遺構（第4図）

E地区では、大小の礫を用いて作られた配石・集石遺構27基と性格の不明な落ち込みも含めて10余基の土坑が検出された。

このうち、配石遺構・集石遺構としたものは、形態上次の3類に分類できる。1. 磚が円形に配設されたり中央の大きめの礫の周囲を開むもの。2. いわゆる早期の集石遺構に類似し、磚の配置がみられないもの。3. 少量の礫がかたまっているものである。これらの磚はいずれも加熱され、赤変したり脆く風化したりしている。焼磚自体は、包含層中に時折みられたが、それは散見的でかたまつては検出されていない。遺構はS I 1・2を除いてほぼ近接して、しかも包含層下部からⅢ層またはⅣ層上面で検出されている。そして、検出面はⅢ層が削平されているかのように消滅またはごく薄くしか残っておらず、感覚的には、ややくぼんだ西向きの緩斜面上に宮まれたといえる。当地区では早期の遺物を確認していないこと、この配石遺構内あるいは直上では、後期前半頃の土器のみ出土していること、S I 1・2などアカホヤ火山灰層の残りの良い所のものは、風化アカホヤ層下部からアカホヤ層上面で検出されていることなどから、これら配石遺構等は縄文時代後期前半の所産と思われる。以下、その代表的なものについて述べる。

第5図はS I 2とS I 8である。S I 2は配石のある遺構で、風化アカホヤ層下部で検出された。遺物は伴わない。中央に大石を置き、周開を偏平に近い礫で囲んでいる。中央の礫は掘り込みの中に据えられたと思われ、微量の炭化物を含む黒褐色の埋土が残る。

S I 8も配石のある遺構である。S I 9・10と近接して上器密集部包含層の下部で検出された。農道北端の下部にあたる。浅い掘り込みの中に焼磚を集めているが、外側の磚は横



第3図 E地区 A-A'地点土層断面図

0 層…農道。砂利を含む暗褐色砂質土層。バサバサしている。

I a 層…表土。鉛色にのみ残る。黒褐色砂質土。バサバサしている。I bよりやや明るく粘性は弱い。

I b 層…表土。黒褐色砂質土。やや粘性をおび、I =前後の黒っぽい砂粒を含む。最も黒い。

I b' 層…耕作（または擾乱）土。I b と I e' の混在した層。I e' よりやや黒っぽい。

I c 層…表土。黒褐色シルト質土。粘りがありやや締まっている。I aより黒く I b より明るい。

I d 層…農道。暗褐色砂質土。粘性はないがかたく締まっていて白い砂粒が見られる。0 層より黒っぽい。

I e 層…耕作土。黒褐色砂質土。やや粘性をおび砂粒が多い。I a, I bより明るい。

I e' 層…擾乱土。前年度の発掘による擾乱土（表土）が残ったものと思われ。暗褐色の小ブロックで砂粒が多い。やわらかい黒褐色砂質土。I e とほぼ同色。

II a 層…0層に近い色でやや暗い黄褐色砂質土。粘性をおびる。II b 層より少ないが遺物や山礫を包含する。
II a' 層…II a 層とはほぼ同色。シルト質土層でやや暗褐色の擾乱が見られる。土器の色に近い赤褐色の1mm前後の粒が見られるが、土器片粒かアカホヤ粒かは不明。堅く締まる。I d 同様に水の作用を受けているものと思われる。農道の轍の跡かもしれない。
II b 層…暗褐色シルト質土。主包含層。多くの遺物や礫を含む。I e より明るく II a より暗い。II c よりも農道の擾乱を受けているものと思われる。遺物のうち比較的大きな破片はこの層の下部と II c の上部で出土している。
II c 層…暗褐色シルト質土。高い粘性あり。この層の上部にまで遺物が含まれている。下部ではアカホヤから浮いた状態もしくはして配石造構が検出される。II b よりやや黒っぽい。比較的安定した層と思われる。
II d 層…暗褐色シルト質土。遺物を含むが、アカホヤに似て粒のきめが細かい。
II d' 層…黒褐色シルト質土。白色や黄色の細かな粒が見られる。堅く締まる。II c の色に近い。
II d'' 層…暗褐色シルト質土。1mm以下の黄色っぽい細砂粒を含む。II d' よりやや明るい。

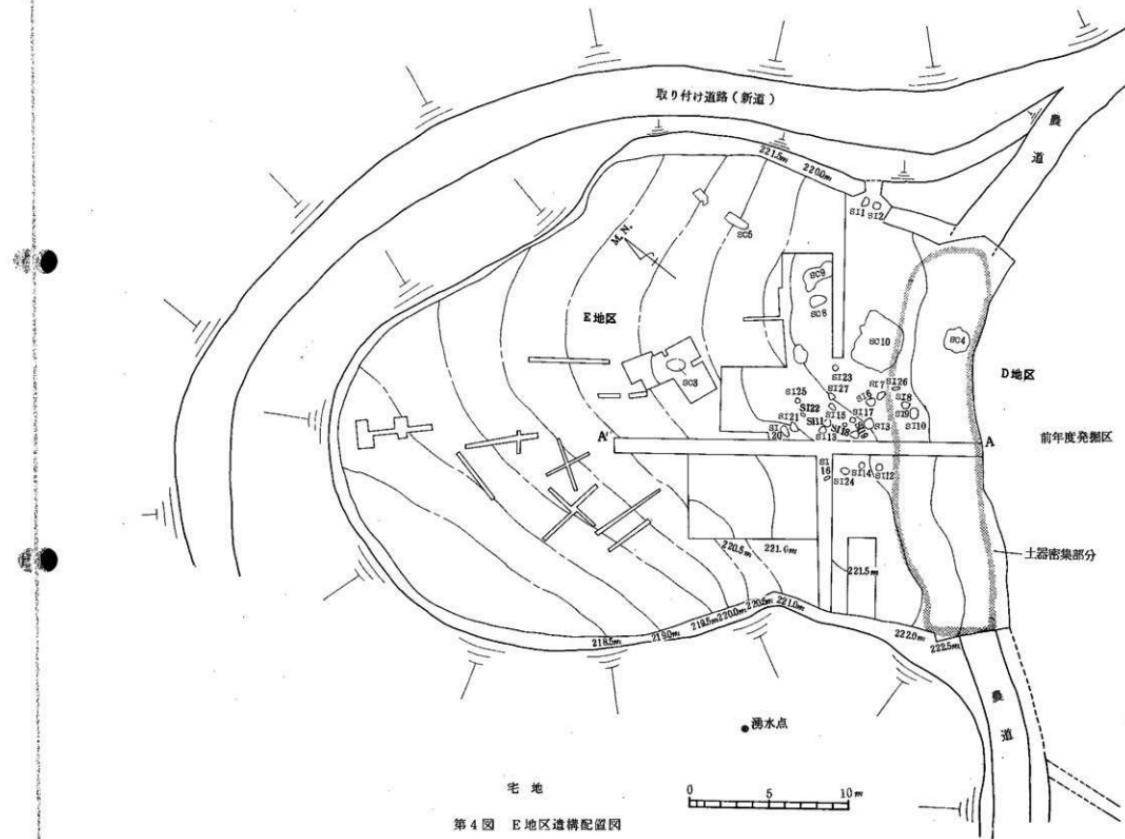
III 層…黄褐色砂質土層（アカホヤ層）。標高の高い方のアカホヤはアカホヤ層の下部に近いと思われ、かなり搅乱（風化）の多い亂れ層（= III a）である。下部はやや粒が大きくなり、バミシとIV層のブロックとが混じる。また、比較的純粋な黄褐色砂質土層も残っており（= III b），これは III a より明るい黄色である。III層全体としては傾斜面上に堆積した状況を残している。

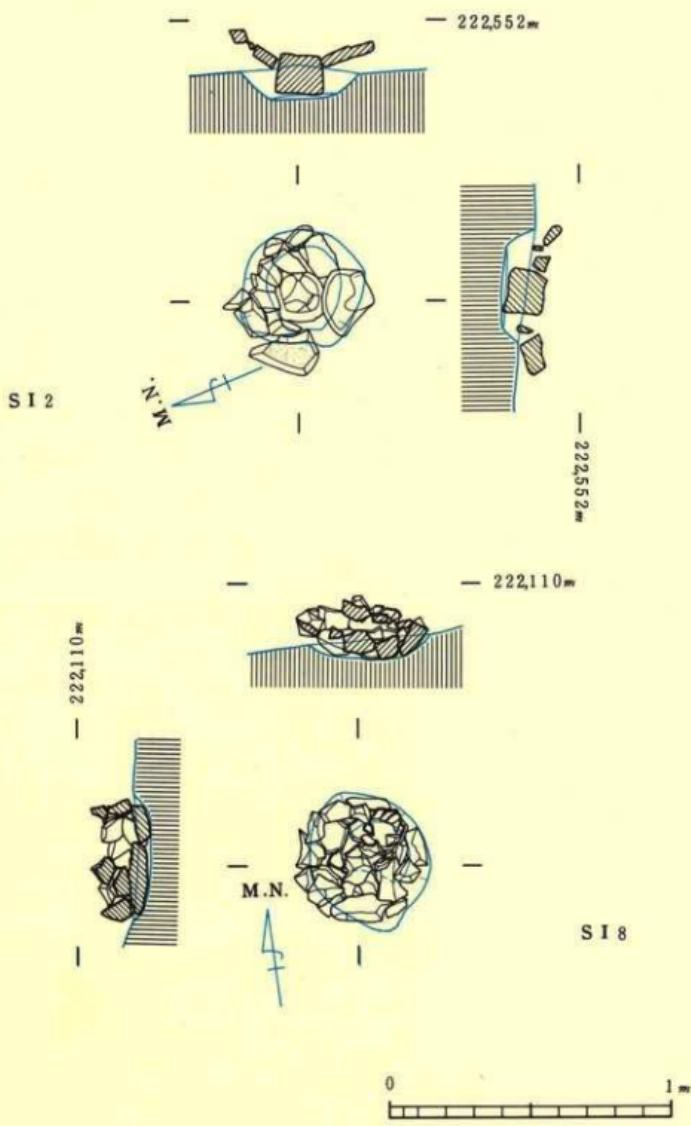
III a'層…暗褐色砂質土。II d に色が近く。III a がさらにつぶされたものと思われる。II d と III a はアカホヤ層に交互に割り込むことから、形成過程を同じくするものと思われる。

IV 層…暗褐色砂質土。弱い粘性あり。灰色をおびた堅い砂質のブロックを含む。自然層と思われる。

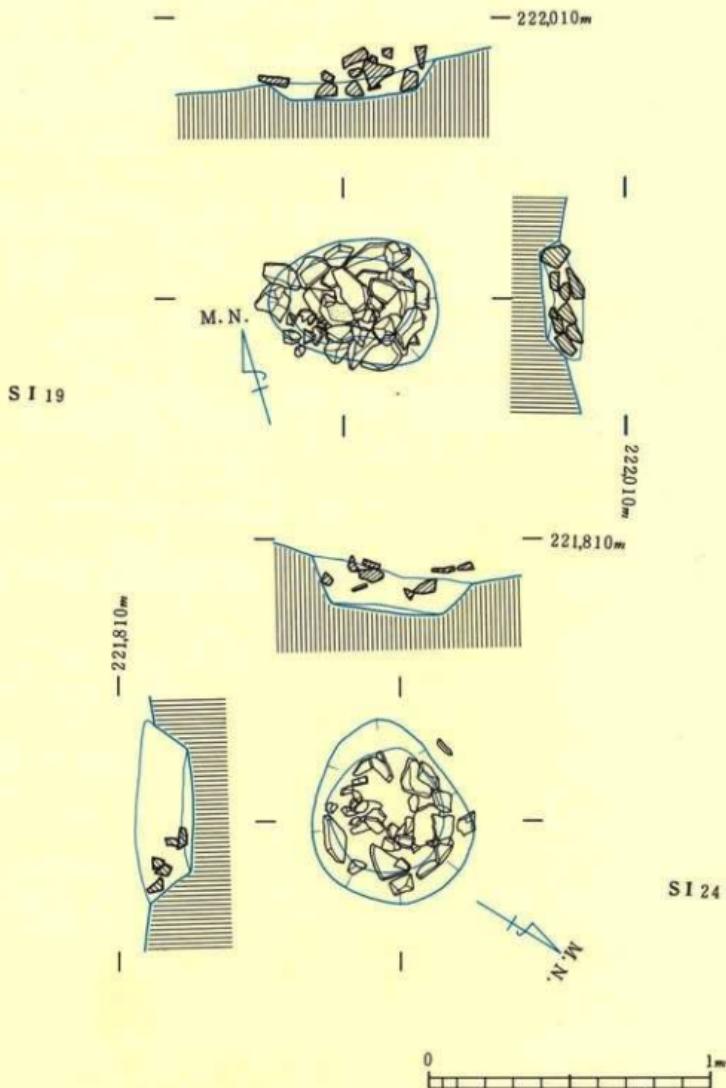
V 層…暗黃褐色シルト質土。自然層。

VI 層…暗褐青色シルト質土。強粘性。V 層より明るく柔らかい。自然層。





第5図 E地区 S I 2・S I 8 遺構実測図

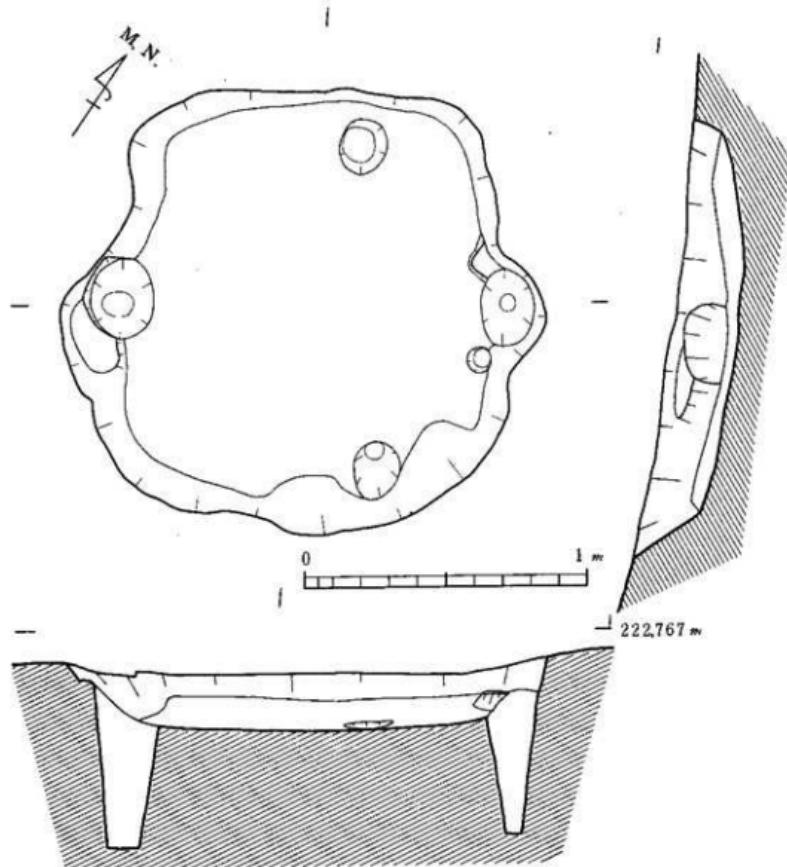


第6図 E地区 S I 19・S I 24 遺構実測図

長に立てかけるように配置してある。疊に接して無文土器片が出土している。埋上は炭化物を含んだ柔かい暗褐色である。

第6図はS I 19とS I 24である。S I 19は早期の集石遺構に類似するもので、焼けた角疊がぎっしりと集めてあり、疊を除くと浅い掘り込み状になる。疊は脆いものが多い。特に配置したようにはみえない。IIc 層下部で検出された。周囲には市来式系土器とともに北久根山式土器（第13図31）も出土している。

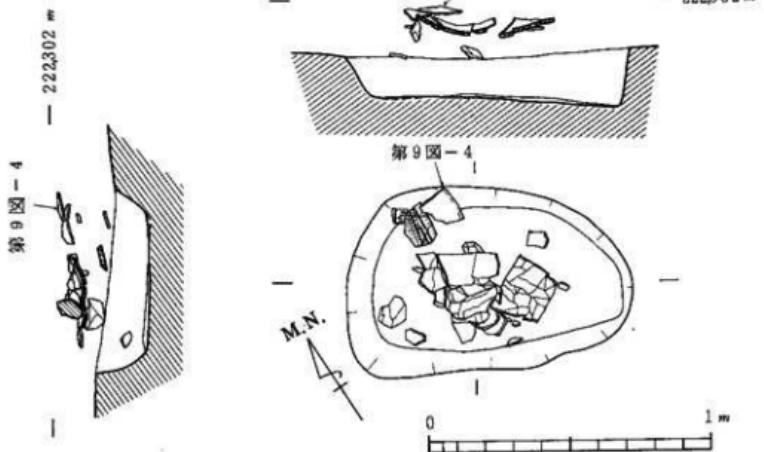
S I 24は、検出面で掘り込みが確認された。埋上は黒褐色で炭化物を含む。焼疊自体は数が少なかった。早期の集石遺構に類似形態のものがみられる。



第7図 E地区SC 4遺構実測図

これらの配石遺構・集石遺構のほかに土坑を11基確認している。殆どは床面が激しく擾乱された木根跡と思われるもので、人為的な掘り込みと考えられるのは1基である。このうち、SC10は住居跡の可能性があるが、土器密集部分の末端付近下位で検出され、出土遺物や直上の遺物の整理が終わっていないため詳細は本報告で述べたい。SC5も未整理であるが、出土遺物は細片が多い。また、SC5の埋土は他と異なり、アカホヤの風化したものである。これは、近くの落ち込みの埋土とはほぼ同質のもので、アカホヤ火山灰層のアカホヤにより近い。この落ち込みの床面付近で曾煙式土器が出土していることから、SC5は前期の遺構である可能性もある。本報告で検討したい。

SC4は東西端に柱穴と思われるピットを有する土坑である(第7図)。中央での検出面からの深さ約30cm、平面プランは約150×140cmの隅丸方形を呈す。出土遺物は少なく、後期前葉の指宿式前後の土器が出土している(未整理のため図示せず)。上部は土器密集部の包含層が覆っていたが、この遺構の検出面と包含層下部との間にはやや隔たりがあることから、SC4は土器密集部包含層の形成以前に掘り込まれ、その後しばらくして包含層が形成されたものと考えられる。



第8図 E地区SC8遺構実測図

S C 8 (第8図)は、アカホヤ火山灰層上面でプランを確認したが、遺物は表土除去直後の風化したアカホヤ面から出土しており、この層から掘り込まれたものと思われる。出土遺物には、縁式土器(第9図4)や炭化した木の実がみられる。

D地区に続く土器密集部については次のような特徴があげられる。南側の斜面上に営まれた集落の背後に位置し、谷や湧水地に面し北西へと傾斜する緩斜面上に立地すること、多量の土器片が集中していること、包含層の渦り方が激しく、しかも厚く堆積していること、完形土器がみられないこと、比較的大きな破片は下部に見られること、最下部には完形に近い土器が1点みられること(第11図19タイプのもの)などである。これらの諸特徴は、宮崎学園都市遺跡群内の平畠遺跡24~25区に類似し、斜面上に営まれた土器廃棄パターンのひとつと考えられる。平畠遺跡のものに比べるとやや規模は小さいが、分布範囲はA地区の北端部(D地区)から土手~農道部分を中心に配石造構付近までのびている。ただ、農道直下の畠地は若干削平を受け包含層が薄くなっている。

2 遺 物

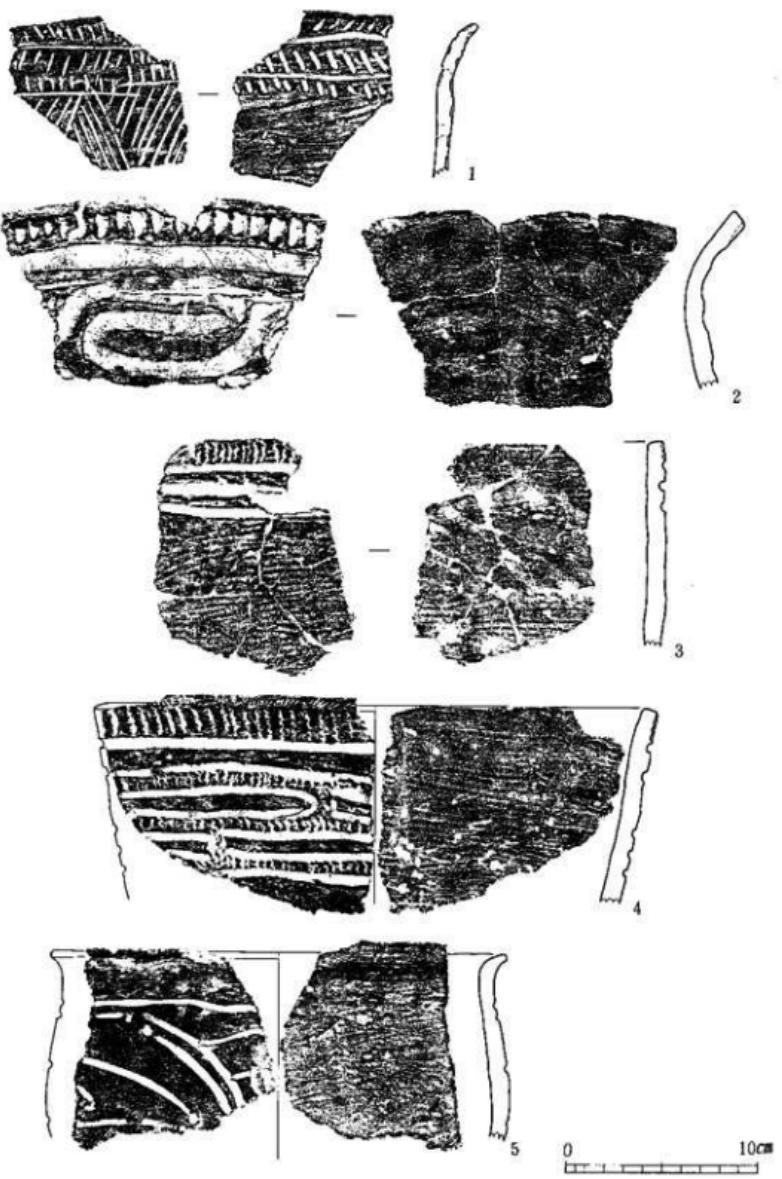
E地区は土器密集部を中心に多量の遺物が出土したが、大半は縄文時代後期前葉~中葉の土器である。以下、整理途中であるが、主なものについて紹介したい。

第9図1は、縄文時代前期曾畠式土器である。試掘中に風化したアカホヤ層内から数点出土したほか、土器密集部の表土除去中に数点、また、土器密集部包含層の最下面で少量出土している。口縁部~胴部あたりまで辛うじて接合できるようであるが、今回は口縁部のみ図示する。全面ナデ調整され、外面はヘラ状具による鋭い沈線文、内面は先端に段のあるヘラ(棒)状具による鋭さのない沈線文である。成形は縁で口縁部がわずかに波打つようである。胎土に角閃石や石英の顆を多く含み、滑石は全くみられない。薄い黄褐色を呈する。

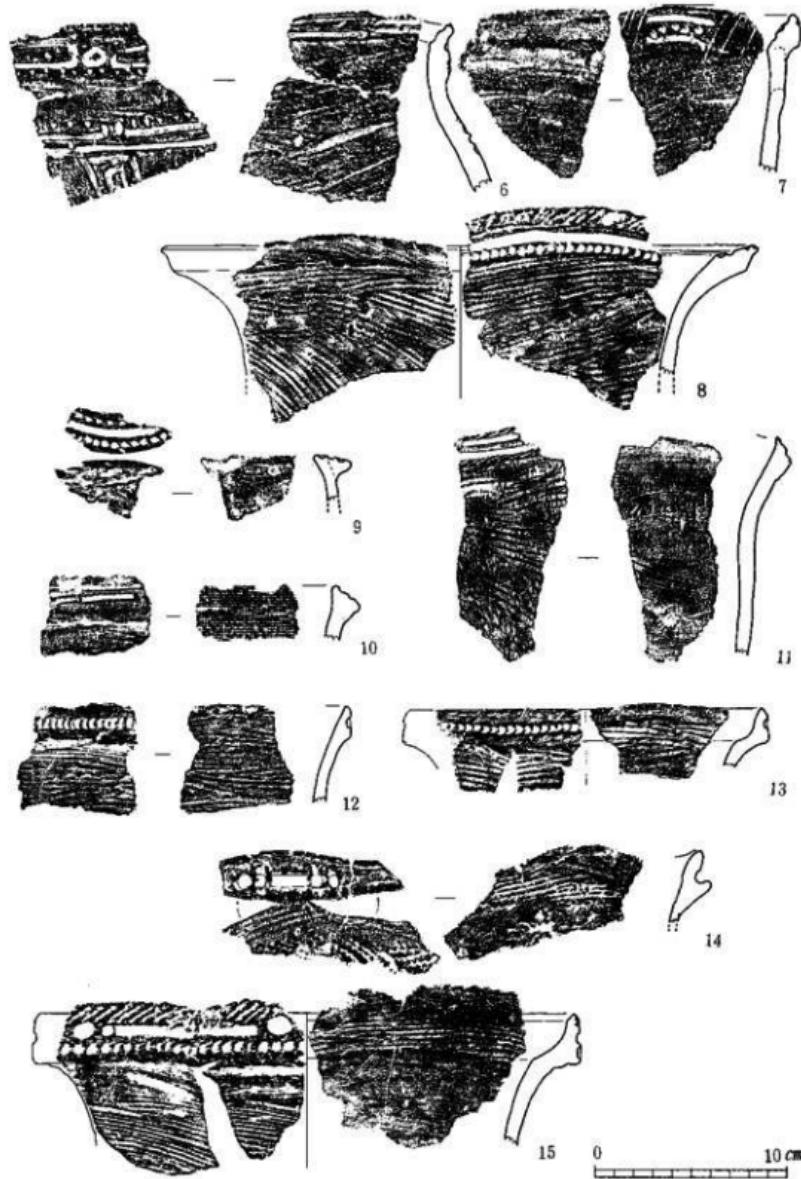
2は、外反する口縁部外面にD字形のきざみを有し、その直下に浅い凹線が一条。その下部にはくつ形文様と思われる浅い凹線文がみられる。凹線文は指先幅程度の幅広凹線である。口縁部は肥厚せず、きざみは一部口唇部に連しているものの口唇部自体には施されない。内外面横ナデ調整され、特に内面は丁寧である。文様の特徴から中期末に遡ると思われる。濃い赤褐色を呈し、1点のみ出土。

3~4は貝殻条痕地に横ナデの器面調整、口縁部に貝殻腹縁による押圧きざみ、その下に太めの沈線文を施すという共通点を有する。3の口唇部にはきざみはみられず、4には浅い押圧きざみがみられる。3は口縁部直下に直線文が集約されていることから岩崎上層式土器に、4は沈線間に貝殻腹縁刺突による擬似縄文様の文様がみられることから縁式土器に相当するものと思われる。いずれも量的には少ない。4はS C 8出土。

5は端部を刺突して止めた平行沈線文と思われる文様がみられることから指宿式土器と考えられる。全面ナデ調整され、外面のナデは光沢がある。



第9図 E地区出土土器実測図・拓影(1)



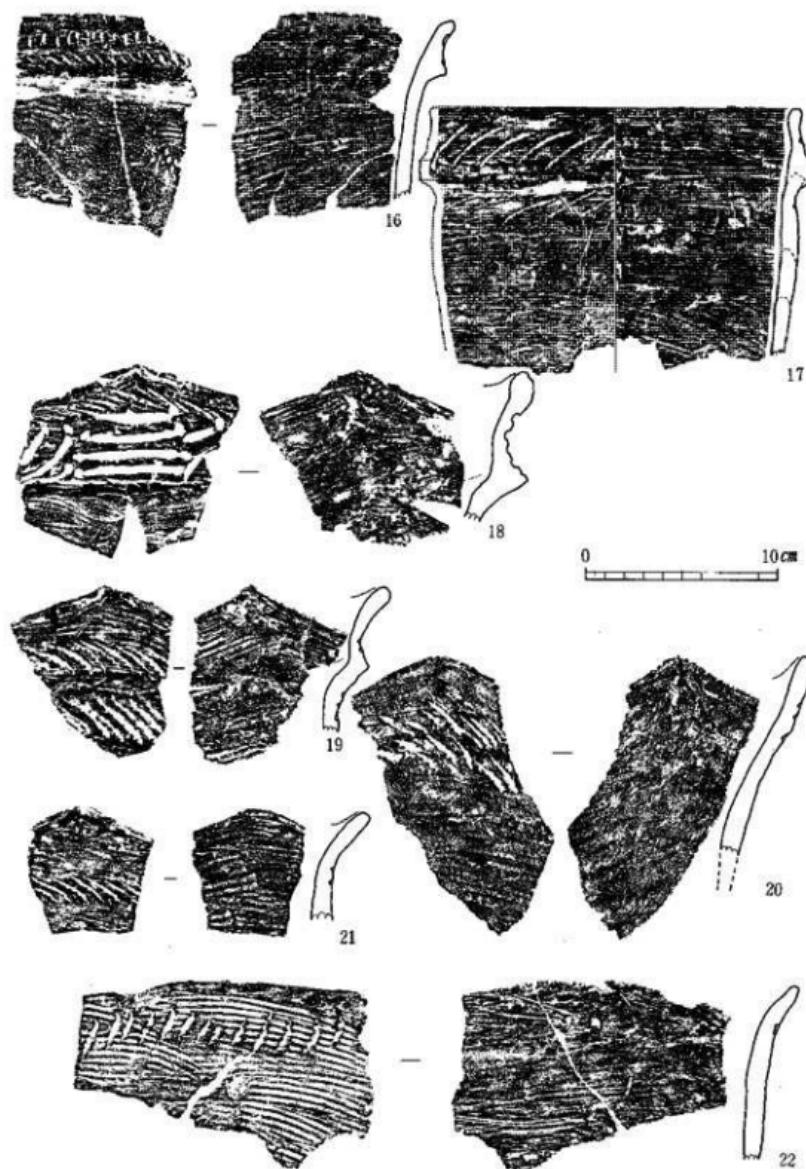
第10図 E地区出土土器実測図・拓影(2)

第10図6は、口唇部に浅いきざみ、その下のやや肥厚した口縁部には沈線文と刺突列点文がみられ、頸部は無文。そして、その下に再び刺突列点文と沈線文がみられる。内傾したゆるやかな波状口縁の土器と思われる。また、口縁部内面は平らに成形され、2条の沈線が施される。これらの沈線には、刺突で止めた部分がみられる。文様の特徴としては、口縁部の円形沈線を中心にその両側の対称文様、無文帯、刺突列点文、凹形沈線の下に対応するかのような端部刺突の沈線等、文様の集約部と思われる箇所があり、後期前半～中葉の磨消繩文土器系統あるいは縁帶文土器といわれるものの文様構成に通じるところがある。全面ナデ調整される。前回の出土につづいて今までのところ1点のみ確認している。

7～11は、いわゆる口縁部上面施文型土器である。⁽¹⁾ 7～8は内面側、9は上面、10～11は外面に文様が施される。7は口縁部外面上部に貝殻腹縁刺突文列、内面には2条の短沈線とその間に刺突文、両側は細い斜沈線文がみられる。口縁部内外面横ナデ。その下部は内外面貝殻条痕の上をナデ消す。8は内面に貝殻腹縁刺突文列、沈線、D字形刺突文列がみられる。施文部のみ横ナデ。ほかは貝殻条痕文がみられる。⁽¹⁾ 7～8とともに口縁部外面が三角形状に肥厚する。9は上面に口唇部を拡張したような文様帯を作り、沈線を挟んで両側に右斜め上からの刺突列点文を施す。口縁部は内消すると思われる。ナデ調整、貝殻条痕が一部みられる。10～11は口縁部を断面三角形に肥厚させ、外上面を向いた文様帯に施文するものである。10は刺突で区切られた短沈線文、11は平行沈線の両側に貝殻腹縁刺突文列がみられる。10はナデ、11は貝殻条痕地を内面のみナデ消す。

12～15、第11図16～22は市来式あるいは市来式系統の土器である。口縁部形態から、文様帯の狭い12～14、文様帯が広い15～17、文様帯がさらに広く断面もく字形に屈曲し外側へ張り出す18～19、く字形の屈曲、張り出しとともに弱く間のびした20、屈曲が尖われ外反した21～22に分けておきたい。

12～13は、先の外上面施文型の土器と異なり文様帯は側面方向を向き、D字形の刺突列点文が施される。14の口縁部文様帯は斜め上方を向くが、その下のくびれ部分（頸部）には貝殻腹縁刺突文列がみられる。口縁部文様帯には、両端を押圧して止めた細めの短凹線文とその両側に刺突文が施される。この文様帯も外側への張り出しあり18などに比べると強調されず、く字形屈曲もみられない。15は口縁端部に貝殻腹縁刺突文列、その下に両端を押圧した短沈線とその両側に木の実の押圧と思われる大きな圧痕文がみられ、下部はD字形の刺突列点文。16は縦方向と斜方向の2列の爪形の刺突列点文。17は口縁帯とその下部に貝殻腹縁刺突文列がみられる。18は、口縁部の文様帯に両端を押圧して止めた横方向の短沈線文4本とその両側には同じく端部を止めた沈線文、これらを挟んで上方が斜方向、下方が横方向の貝殻腹縁刺突文列が施される。19～20はく字形の張り出し部を挟んで上下に貝



第11図 E地区出土土器実測図・拓影(3)

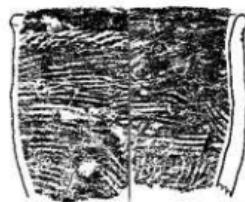
般腹縁刺突文列がみられる。20は張り出しが弱く、刺突文列も乱れて接近している。21～22は口縁部が外反し、頸部に貝殻腹縁刺突文列が施される。これら12～22にはいずれも貝殻条痕文がみられ、その上をナデ消したりしたものもある。ただ、17の内面には板状具によるナデがみられ、他と異なる。また、20はナデ消しが顕著で地文が殆ど残らない。この市米式（系）上器は、今回の調査で最も出土量が多かったが、中でも15～17、18～19、21～22の口縁部形態の土器が比較的多い。

第12図23～27は草野式土器と思われる。特徴としては、口縁端部（口唇部）が丸い形態をしており、胴部などに比べると肥厚気味である。口縁部が強く外反し、そのくびれ部（頸部）から口縁端部までが比較的短い、頸部付近を中心に施文するなどがあげられる。これらは裏がえせば、先の21～22など市米式系統の上器として分けたものには、一般に口縁端部が丸くない、口縁端部と胴部の厚さはほぼ同等か端部の方が細くなる。口縁端部内面側は外反していない。頸部から端部までが23～27に比べて長めである。波状口縁土器がみられるなど、23～27との違いが施文部位など一部を除いてみられるということである。しかし、施文部位以外に文様の上でも両者は21～22と23～24・26などのように共通の部分がみられるというのもまた事実である。

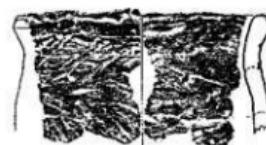
23～24・26は頸部に貝殻腹縁刺突文列を施す。25は頸部のやや上部に貝殻腹縁刺突文列、下部に浅くかすれた沈線文がみられる。沈線文の端部や途中は止めてある。27は頸部に重なりあう横方向の貝殻腹縁刺突文列を施し、その下部に横方向の同文様を施している。器面調整は、24の内面、27の外面がナデのはかは全て貝殻条痕文あるいはその上をナデしている。出土量はそう多くない。

これまでの上器の色調は、3～6・9・19～20・23が褐色～暗褐色系、1・13が黄褐色系、2・7～8・10～12・14～18・21～22・24～27が赤褐色（新版標準土色帖の橙色）系統の色調を呈している。

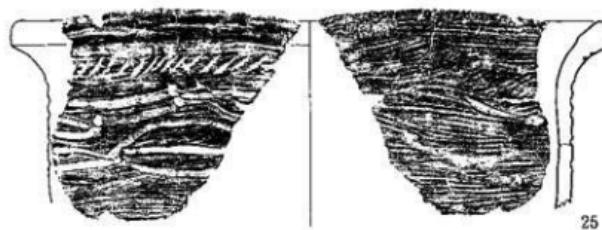
第13図28～32は磨消繩文系および黒色磨研系の上器である。出土量はごく少ない。28は、口縁端部に太めの沈線が一条巡り、口唇部は平坦。外面は口縁部沈線の縁から繩文が施され、その下部に2本の曲沈線に挟まれた横ナデの無文帯がみられる。鹿児島県曾於郡志布志町の中原遺跡出土⁽²⁾ A類土器の中に類似する口縁部のものがみられる。29は小池原上層式土器と思われる。太めの曲沈線間に繩文が施され、頸部は横ナデ。口縁部は肥厚するようであるが不明。28～29の内面は横ナデされる。30は鐘崎式土器である。文様の集約部の口唇部には、粘土紙貼付けと思われる繩文の施された逆W字状の文様があり、その直下には橋状把手の剥離した部分がみられる。口唇部の他の部分は内側から外への刺突列、口縁部は繩文とそれを二分して沈線が一条巡る。頸部と繩文間の磨消部分はナデである。内面



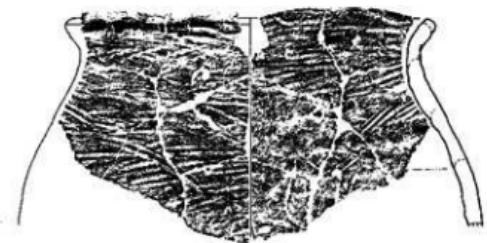
23



24



25



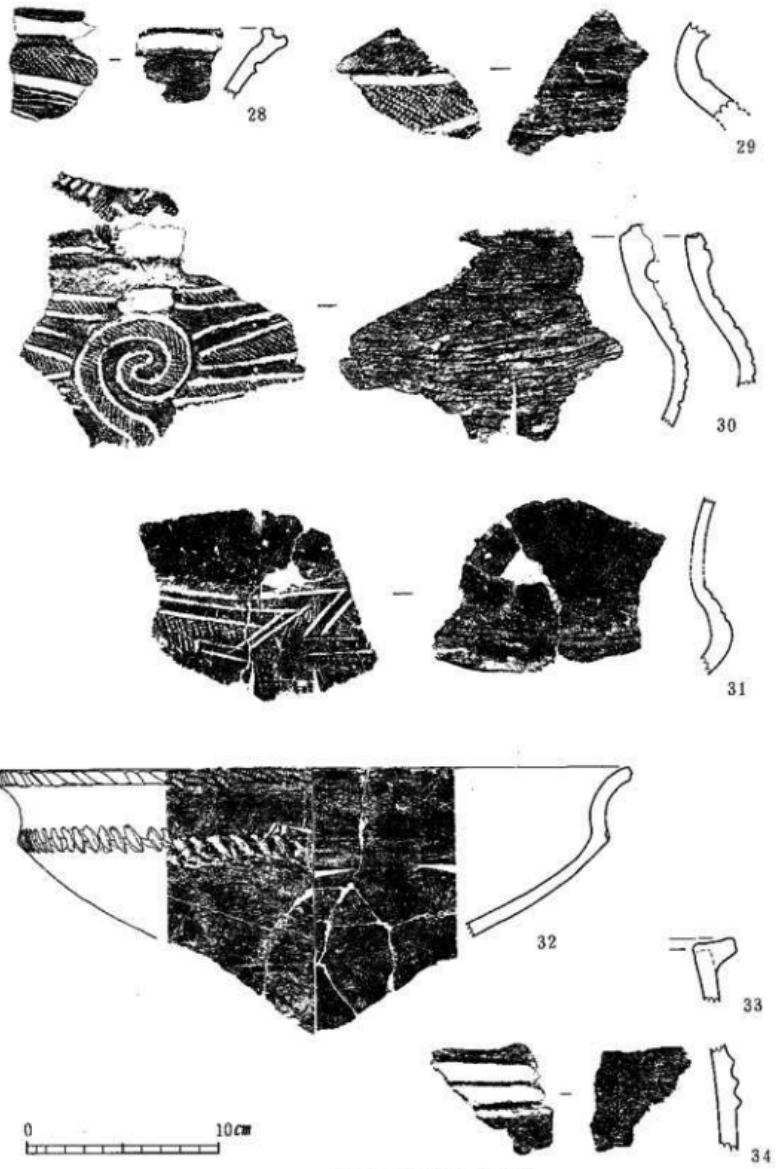
26



27



第12図 E地区出土土器実測図・拓影(4)



第13図 E地区出土土器実測図・拓影(5)

はヘラナデ。31は北久根山式土器の鉢形上器である。外面の長くのびた頸部と内面はヘラミガキ。頸部と胴部の境には沈線が一条通り、下部は直線と短沈線による幾何学的な文様がみられる。その沈線文間に貝殻擬似縞文を施し、部分的にナデ消している。沈線はいずれも浅い。沈線の端部あるいは中途を縦の短沈線（押圧によるきざみ）で区切っている箇所がみられる。文様は全体に雑である。32は型式不明の浅鉢形土器である。全面ヘラミガキされ、口縁端部は巻貝による斜方向の圧痕、屈曲部は先端の欠けた巻貝と思われるものによるきざみが施される。県内では類例を知らないものである。これら28～32の土器は、31が黒褐色を呈すほかは褐色系統の色調を呈する。

その他の遺物（図版12～14）

図化した土器以外に少量出土した土器や無文土器の代表的なもの、土器片転用加工品、石器など、ここで図版の遺物について簡単に説明しておきたい。

図版12～13

35は口唇部が平坦な肥厚口縁土器。断面台形。文様は半截竹管による縦2列の押し引きとその両側3本の沈線。ナデ調整。出水式類似の土器と思われる。36はやや内湾気味の三角形断面を有する口縁部。文様は口唇部斜めの押圧きざみ、口縁帯に下部を刺突した波状沈線。波状沈線の下側は貝殻腹縫刺突文で充たされる。肥厚部下位にも沈線がある。市来式に似るが型式は不明。内面貝殻条痕の上をナデ。外面ナデ。37は多量の滑石を含む。中央を穿孔した耳状貼付け装飾の縁はきざみが巡る。文様は爪跡の残る押圧文と沈線文である。ナデ調整。型式不明。38は口縁部が肥厚、口唇部にきざみがみられ、39は内溝する口縁の口唇部にきざみ。40は口縁部内面側が外傾、外面はそれ程反らない無文土器。41は口縁端部が平坦で42は口縁端部が丸い無文土器。43は口縁部外反の無文土器。44は脚台付浅鉢形土器である。外面に装飾があり、内面は沈線文、外面は沈線文と突帯文。波状口縁で調整はナデ。このほかに分厚い脚台部片も出土している。45～50は土器片加工の円盤である。円形に大まかに打ち欠いたもの。円形に丁寧に加工したもの、打ち欠き面を研磨し、より円に近く加工したものなど多数出土している。使用部位は45～48が胴部片、49～50が口縁部片で、口唇部は残したままにしている。51は土器片転用鍛で1点のみ出土している。両側面をわずかに磨りくぼめている。周囲は研磨と思われる。

図版14

石器は非常に少ない。52はS13に用いられていた石皿である。きれいに磨りくぼめてあり、中央には敲打痕がある。53は磨石で両面研磨、側面は敲打痕あり。54～55は磨製石斧。56は1点のみ出土した石錐である。両側から抉るように丁寧に打ち欠く。57は黒曜石製の打製石錐。数点出土。58～59は剥片石器である。58は両側から押圧剥離に

より刃部をつくり、59は片方の自然面を利用し、剥離面側から押圧剥離による片刃の刃部をつくっている。59と同石材の刃部のない剥片は量的に多く出土している。

- 註 (1) 本田道輝「田中塚遺跡出土の口縁部上面施文型の土器について」『鹿大史学』第31号 1983
(2) 新東亮一「中原遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』(9) 1985

第4節 弥生時代の遺構と遺物

今回は遺構は検出していないが、第13図33～34のように弥生時代中期後半の豐形土器片が少量出土している。調整はナデ。胎土に金色の雲母片を含む。

第Ⅲ章 結 語

丸野第2遺跡は縄文時代後期前葉～中葉の住居跡を中心とする遺跡である。今回は、昨年度調査区の北西側舌状尾根部（E地区）の発掘調査を行った。調査の主眼は、前回検出された土器溜まり（D地区）の範囲確認と性格の把握においていた。その結果、本年度は次のような調査結果が得られた。

1. 土器溜まりに統く土器密集部分は、前述したような理由から宮崎学園都市遺跡群の平畠遺跡24～25区の傾斜地への土器廃棄パターンに類似し、当密集部も土器廃棄場と考えられる。出土遺物の大半は市来式（系）土器で、口縁部形態では、文様帯が広いもの（15～17）や文様帯がさらに広く断面もく字形に屈曲し外側へ張り出すもの（18～19）、そして、屈曲が失われ外反しているもの（21～22）などが量的に多い。

2. 縄文時代早期の集石遺構に類似の焼跡を用いた集石遺構・配石遺構が、アカホヤ火山灰層の上面で検出された。周辺の出土遺物から縄文時代後期のものと思われる。これらの遺構の分布は、土器密集部の中心とは重ならず、より標高の低いやくばんだ所に営まれている。

3. 性格不明の落ち込みを含め多数の土坑を検出した。そのうち、明らかに人為的な掘り込みと考えられるものは、出土遺物から縄文時代後期のものと思われる。また、埋土の比較から、前期の可能性のある土坑もみられる。

出土遺物については、昨年度の概要報告書⁽²⁾の中で堅穴住居跡の切り合い関係によって編年がなされ、B地区でⅠ期（岩崎上層式段階）、Ⅱ期（指宿式段階）、Ⅲ期（市来式段階）、Ⅳ期（草野式段階）の4段階の住居跡が確認されるとともに、従来の土器編年を追認している。その上でA地区ではⅡ～Ⅲ期、土器満まりⅡ～Ⅲ期、C地区ではⅢ～Ⅳ期に生活が営まれたという主旨の報告がなされている。今回のE地区では土器密集部で市来式系統の土器が多量に出土したが、他の型式の土器は市来式に比べるとごく少ない。その点で、指宿式段階から市来式段階とされた土器満まりは、同じ土器発掘場の調査でありながら出土土器の時期が多少異なるようである。この相違が何によるものかは今後両地点の調査結果を整理検討していく中で明らかにしていきたい。出土量の多かった市来式（系）土器については口縁部形態に5種類程の違いがみられた。これらの包含層内における層位的な出土状況について⁽³⁾はまだ整理していないため判然としないが、従来言われているような時期的変遷を示すものなのか、機能用途による形態差なのか今後の課題としたい。さらに、市来式（系）土器のうち、く字形口縁の特徴を持つもののかなり間のびし文様も簡単な20の類や今回草野式土器から分けて紹介した21～22などの土器が、市来式土器分布図の末端部での現象を示すものなのか、あるいは時期差や機能差を示すもののかは、あわせて検討課題としたい。これらの土器は宮崎県内では、宮崎市平畠遺跡、松添遺跡、納屋向遺跡、山田町中村遺跡、小林市東牧場遺跡などでもみられるようである。⁽⁴⁾

県内では縄文時代後期の遺跡は発掘調査例も少なく、また、遺跡数もあまり知られていないため、ここ丸野第2遺跡の発掘調査は今後の縄文時代後期研究の指標のひとつとして重要な意義がある。

註(1) 北郷泰道・菅村和樹・日高孝治「平畠遺跡の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 1985

(2) 長津宗重「丸野第2遺跡」「田野町文化財調査報告書」第4集 1987

(3) 本田道輝「市来式土器 西之表市納屋向遺跡」『鹿児島考古』第12号 1978

(4) 前掲⁽¹⁾のほか

鈴木重治・石川恒太郎「松添貝塚」『宮崎市文化財調査報告書』第2集 1974

納屋向遺跡……南九州短期大学博物館（宮崎市大字田吉）で実見

日高孝治・北郷泰道「中村遺跡」「山田町文化財調査報告書」第1集 1983

菅村和樹・岩永哲夫「東牧場遺跡 日向考古資料Ⅱ」『宮崎県総合博物館研究紀要』第11輯 1986

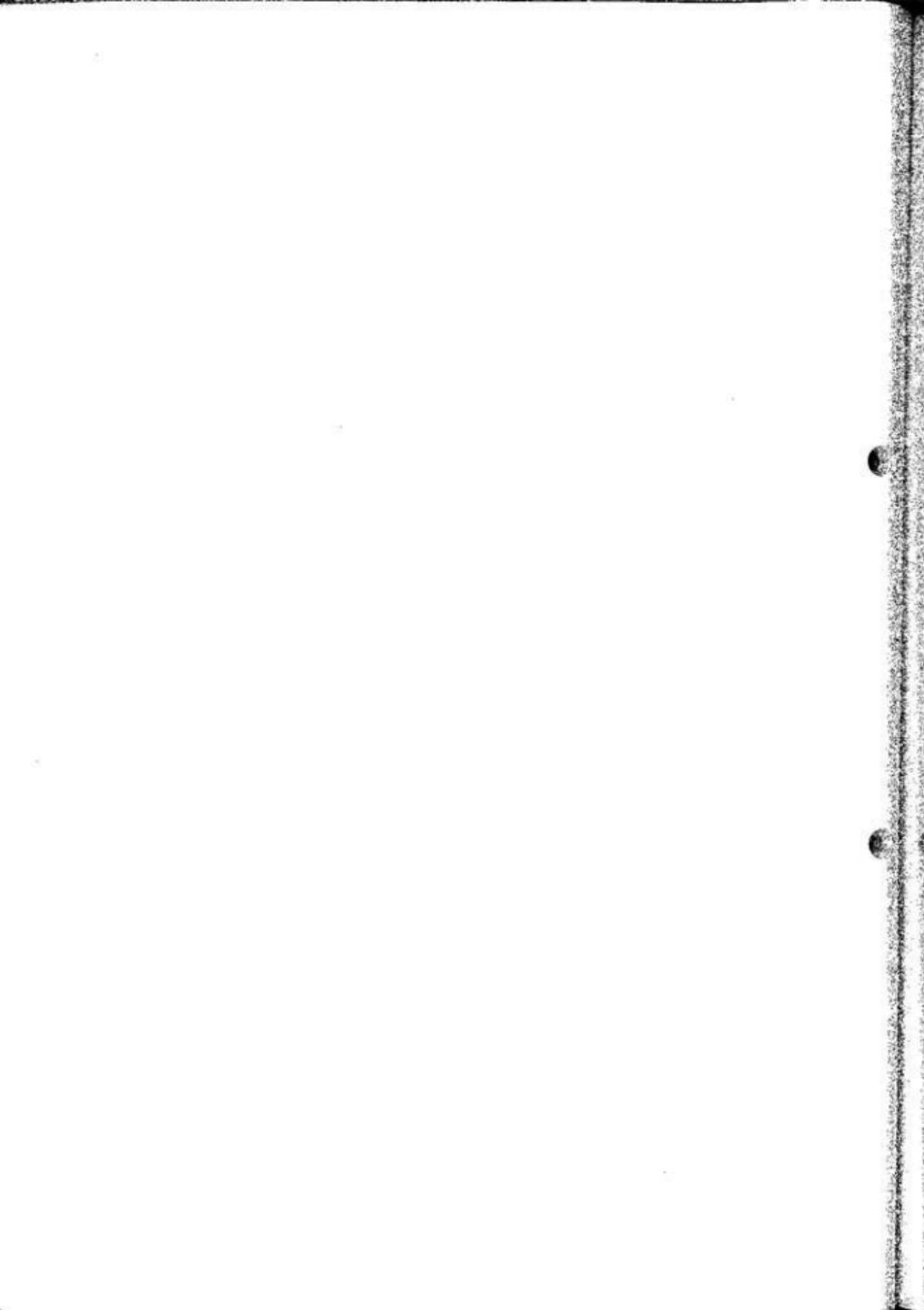
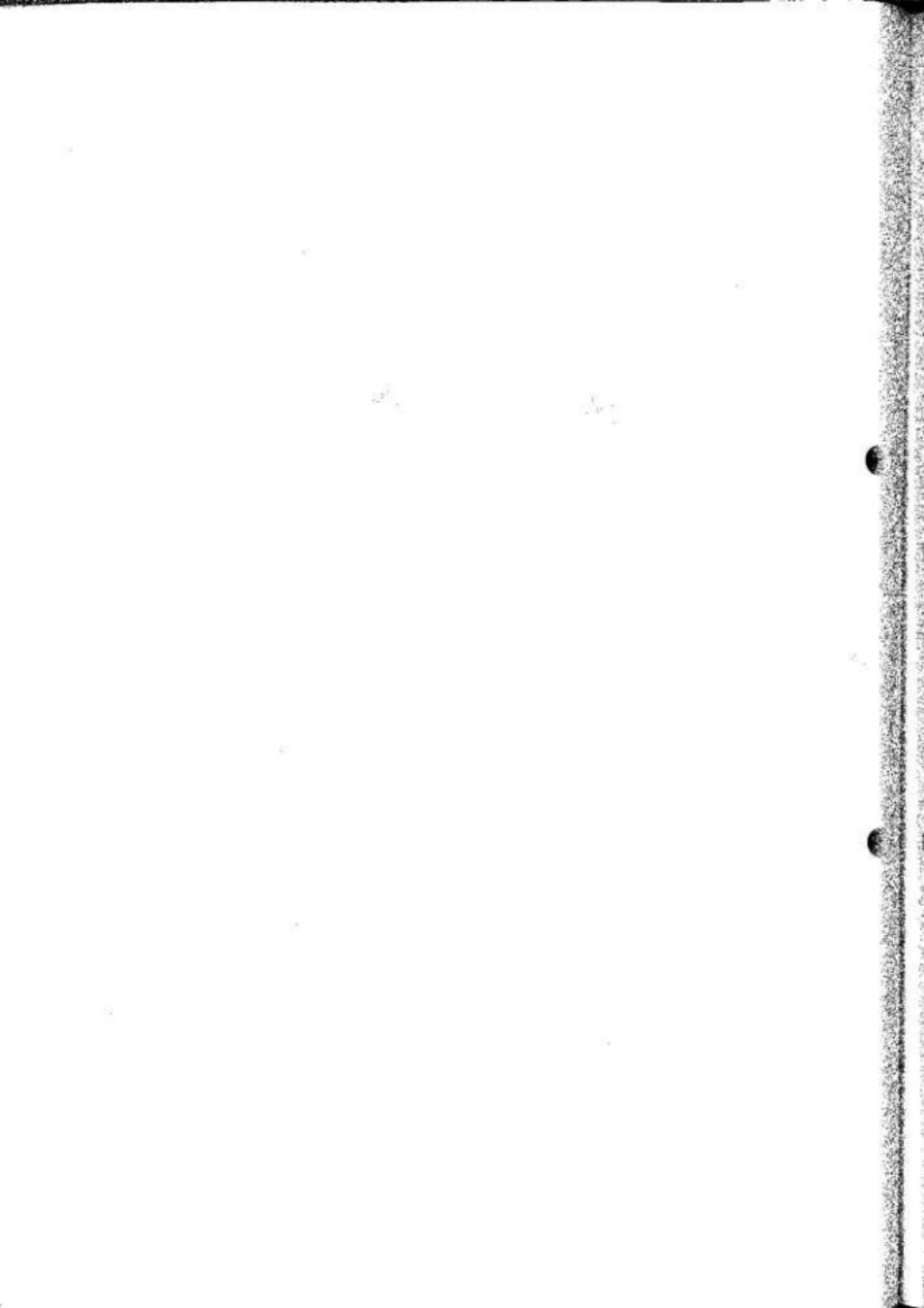


図 版

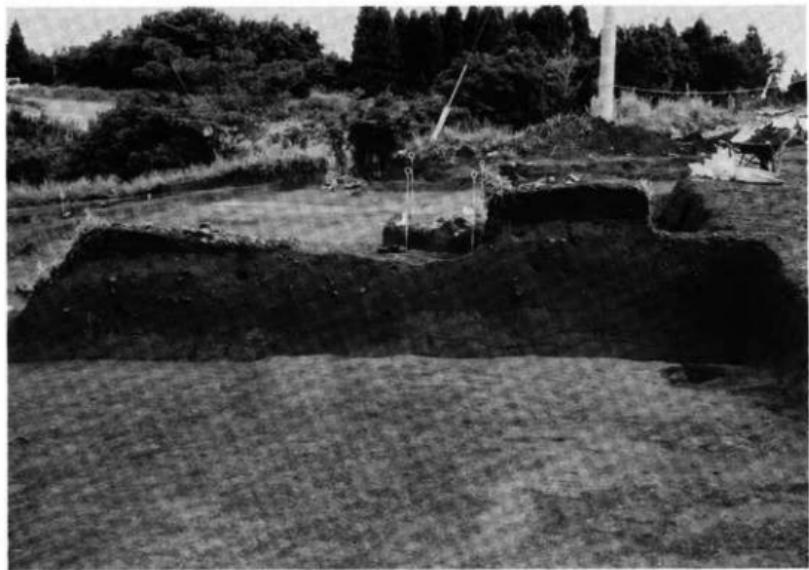




E地区近景（北から）



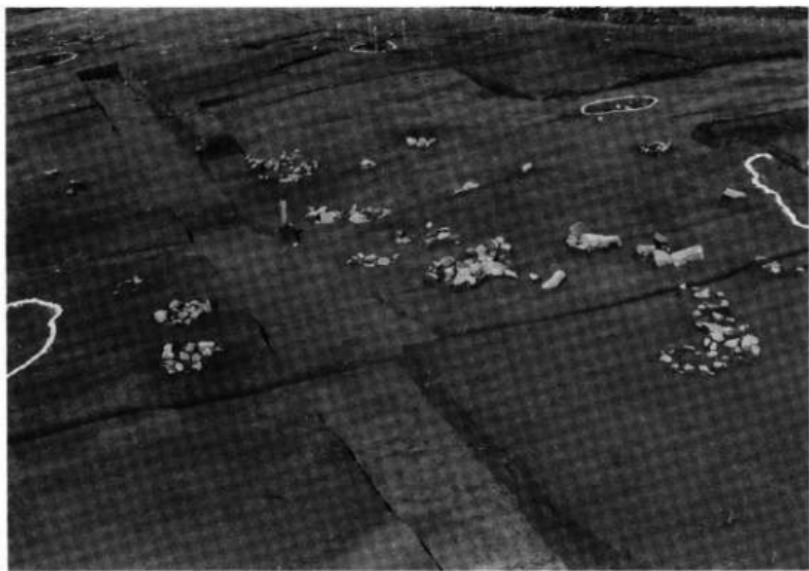
土器密集部分遺物出土状況（南から）



遺物包含層断面状況



遺構全景（南から）



配石遺構分布状況

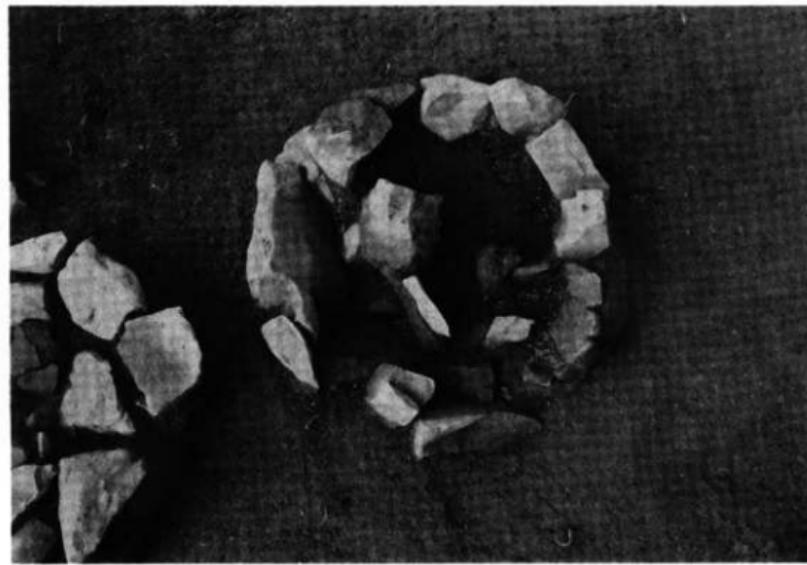


SI 8~10 検出状況

図版
4



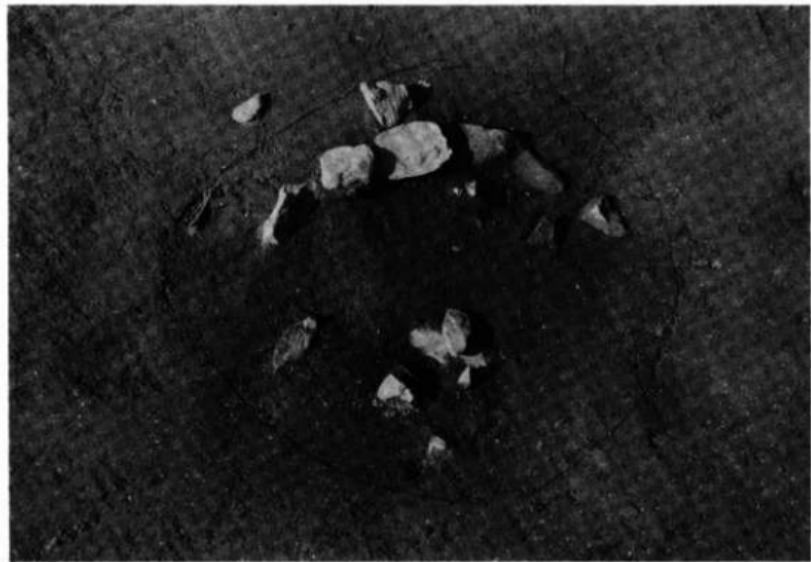
S I 2 検出状況



S I 8 検出状況

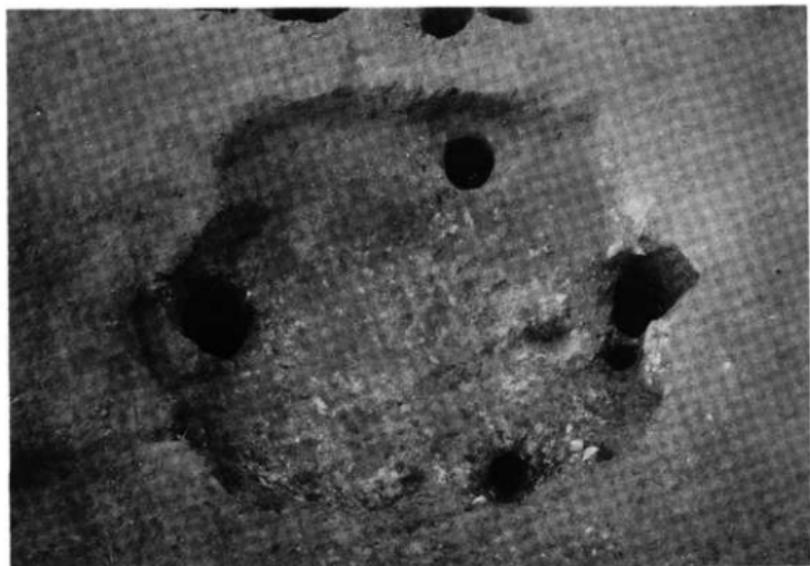


SI 19 検出状況

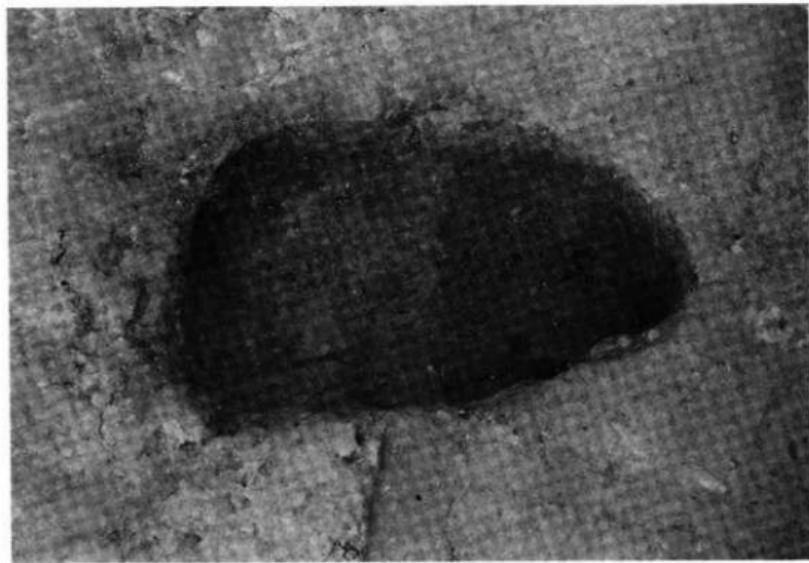


SI 24 検出状況

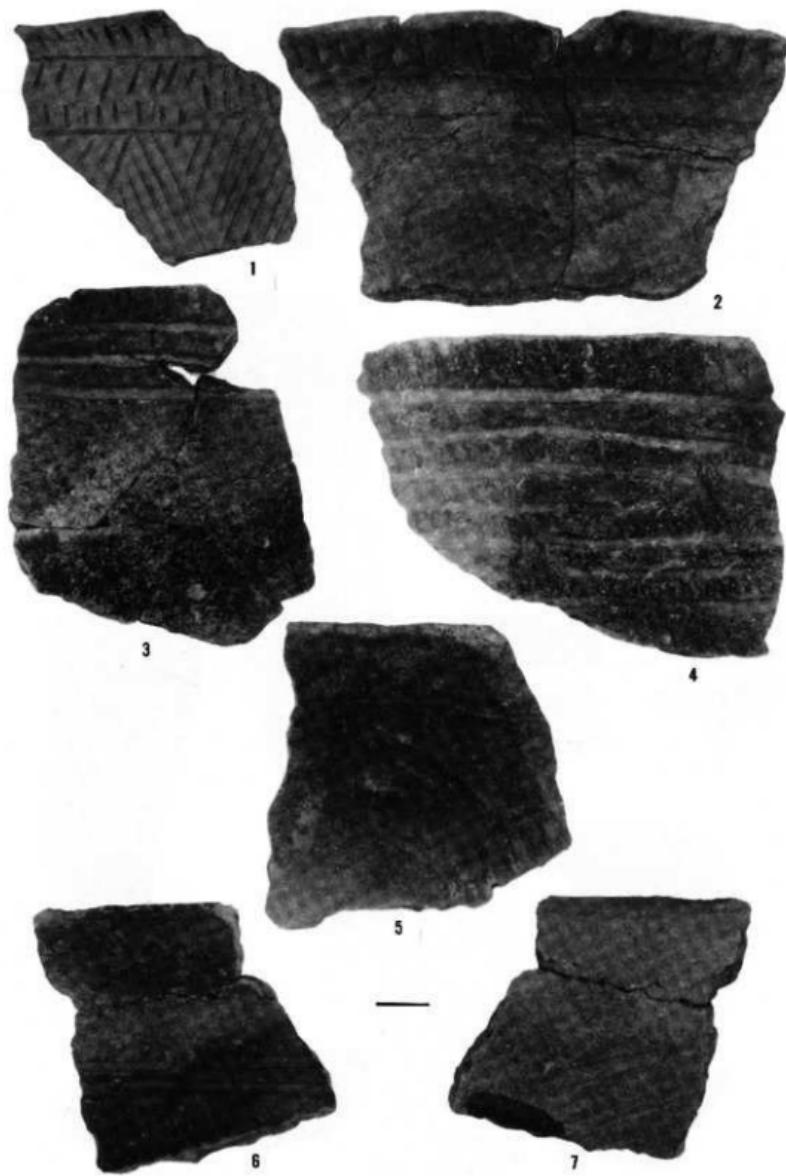
圖版
6



SC 4 完掘状況

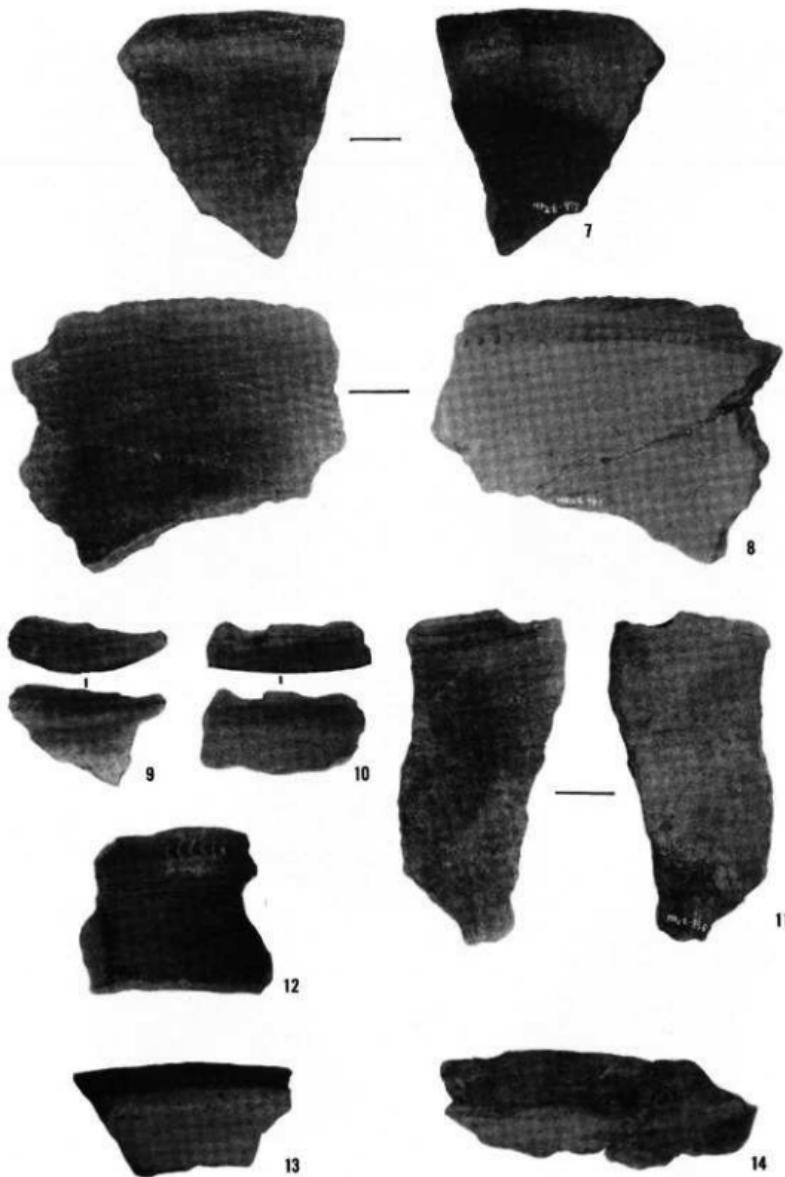


SC 8 完掘状況



E地区出土縄文土器(1)

1~34は図遺物番号



E 地区出土縄文土器 (2)



15



16



17



18



19

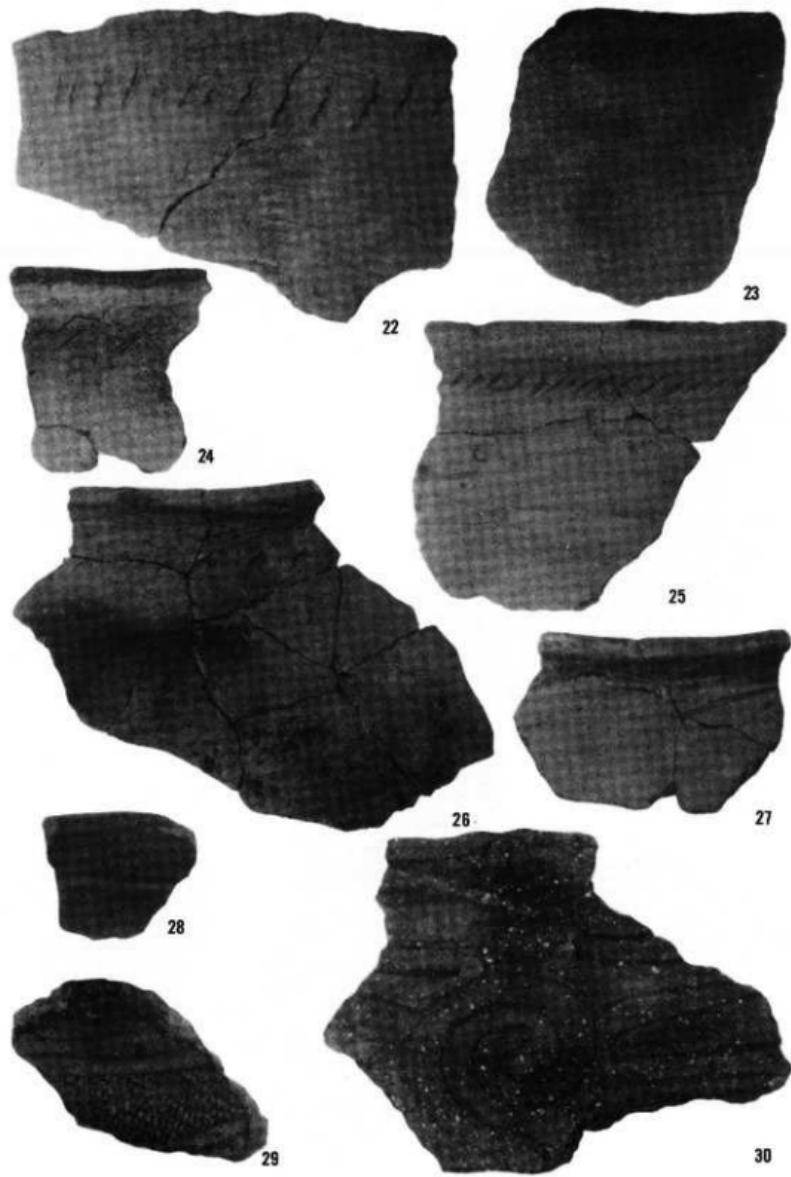


20



21

E 地区出土縄文土器 (3)



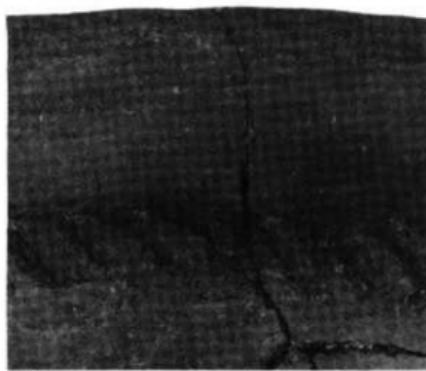
E地区出土縄文土器(4)



31



32



32



33



34



35



36



37



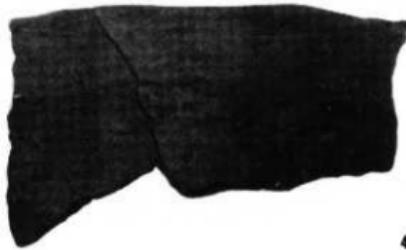
38



39



40



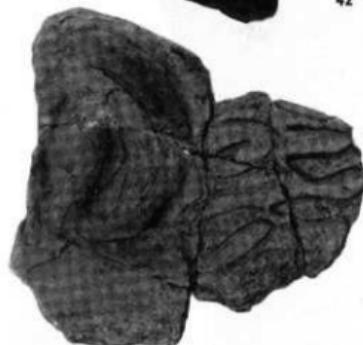
41



42



43



-



44



45



46



47



48



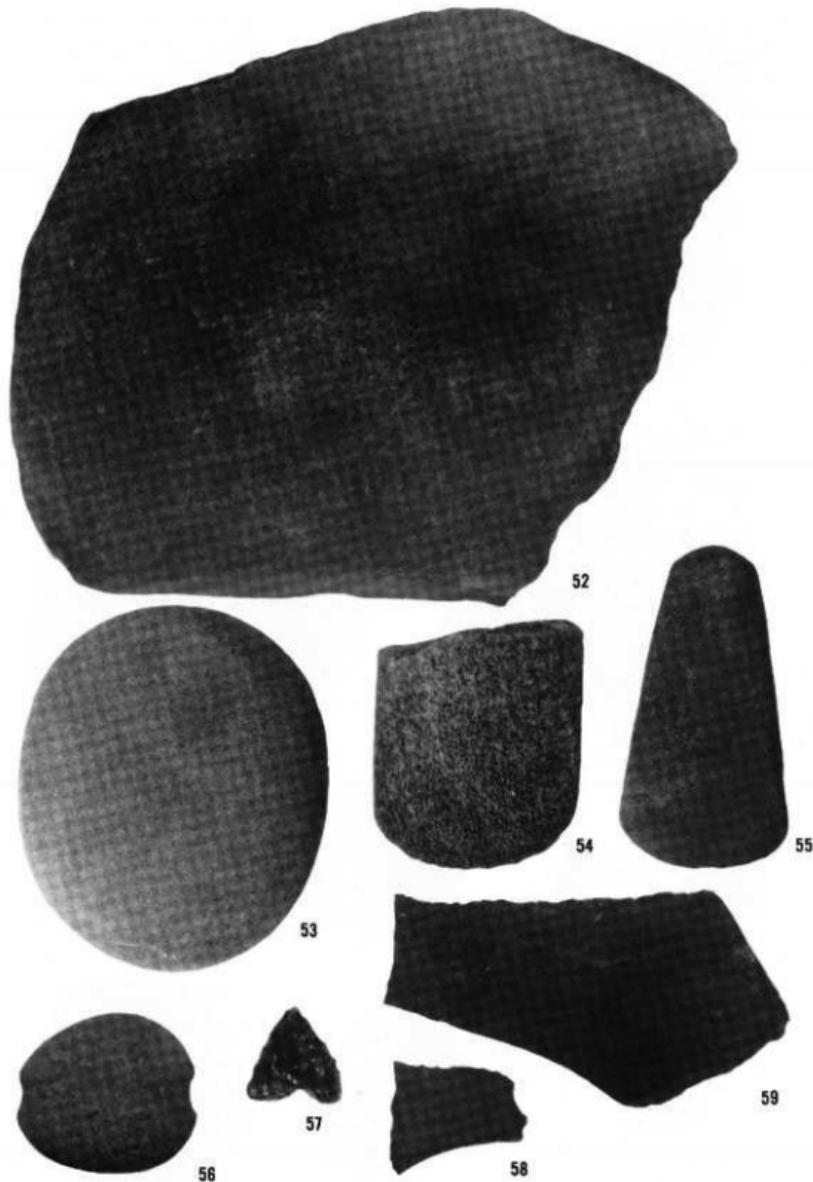
51



49



50



E 地 区 出 土 石 器

田野町文化財調査報告書第5集

まるの
丸野第2遺跡

— 第2次調査 —

県営農地保全整備事業七野地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

発行年月日 昭和63年3月31日
発 行 田野町教育委員会
印 刷 昭和印刷